



木村 龍治・立平良三 著  
西田 篤弘

### うずまく大気と海

岩波ジュニア科学講座 第9巻, 岩波書店, 1984年10月刊, 148頁, 2400円

この本を読む人は、まず最初のページでコペルニクスの転換の洗礼を受ける。そこには1枚の写真があって、暗闇の中に大小ふたつの三日月の物体が見える。これは土星に向かうボイジャー1号が地球をふり返って撮った写真であり、これまで人類の得た、もっとも遠くから見た地球と月の姿である。そして「まっくらな宇宙空間に浮かぶ小さな球の上で、あなたはいま、この本を読んでいるわけです」と、著者は語り始めるのである。

発想の転換は空間についてだけのものに留まらない。地球上に最初に生まれた人間を“人間1号”, 次が2号・3号として、読者は自分が人間X号であることを自覚させられる。人間1号はサル祖先から北京原人への過程のどの時点にいたかを想い追うとき、私達は地球の歴史の、途方もない年月の長さを実感するではないか。このような時間・空間の把握のもとに、宇宙船地球号の話は始まるのである。

さて、その地球は、人間の目には丸いが、もし陽子や電子まで見える宇宙人が眺めたら、ちょうどハレー彗星のように見えるだろう。その長い尾の部分は地球の磁気圏で、頭部の、それもほんの核心部分だけが地球の重力圏なのだ、著者は語り進む。そして重力圏の底の部分の大気や海のふるまいが、次々とダイナミックに紹介される。いわく「空気の重さがわかりますか」「そよ風は国内線か国際線か」「なぜ空気は水蒸気で飽和しないの

か」「気象レーダーは雲のレントゲン写真」「積乱雲は乾電池だ」等々。

これらのキャッチフレーズからも察せられるように、説明は斬新な発想に満ち溢れており、明快かつ愉快なることこの上もない。たとえば四季のメカニズムを説明する所で、著者はガリレオ以前に戻り、天動説的手法を用いる。まんやかにリンゴ(地球)を置いて、その周囲にハエ(太陽)を東西方向に回りながら飛ばせ、南北に変位して螺旋を描かせるのである。このような愉快なイラストがある一方で、大気科学の第1級の文献からの図や写真もふんだんに示されていて、私はこの本が“ジュニア”講座であることを忘れて楽しんだ。いまは中学生の息子が“Woom”“Heh”“Ah so nanoka!”と感嘆詞をもらしながら読んでいる。

後半で話は、大気と人間社会との接点である天気予報に進む。そこではデジタルレーダー・数値予報・確率予報などが手ぎわよく説明される。これらの予報と実際の雨の降り方との対比図を見て、読者は、雨というポピュラーな現象の意外な側面を知るだろう。

そのあと読者は再び地表面から遠ざかり、オーロラの世界を散策して楽しい旅を終える。残りのページがついに尽きてしまったことを惜しみながら……

しかし、この本が契機で呼び起こされた自然現象への関心は、読者をめいめいの新たな旅へといざなうだろう。まことにこれは青少年だけの本ではない。理科教育にたずさわる人達、文科・理科にかかわらず学生諸君、そして脳ミソの固くなりつつある私のようなオジジなど、多くの人々におすすめしたい。

(櫃間道夫)

## NEWS

### 世界の異常天候とその影響評価について

世界の異常天候とその影響評価については、アメリカの NOAA から気象庁気候変動対策室へ“Climate Impact Assessment”が未着であり、先月号に引きつづ

き今月号も掲載することができませんでした。現在問い合わせ中ですが、入手できしだいまとめて掲載する予定です。

(天気編集委員会)

「天気」32. 1.